

麦の穂

第59号

2016年11月
特定非営利活動法人

麦の会

TEL&FAX

022-299-1279

〒983-0834 仙台市宮城野区松岡町 17-1

郵便振替口座 02200-8-46178

E-mail : muginokai@k5.dion.ne.jp

http://www.muginokai-koppe.com

目次 共同連大阪大会報告

飯嶋 茂 . . . 1p

明石 澄子 . . . 3p

斎藤 七恵 . . . 5p

氏家 大介 . . . 6p

松本 祐一 . . . 7p

図書室は秘密基地

後藤 ゆかり . . . 8p

秋

阿部 央希 . . . 12p

2016年共同連大阪大会に参加して

飯嶋 茂

コッペも始めてからもうすぐ30年になる。コッペをやりたいといった言いだしっぺが修行に行ったのが、共同連のメンバーの大阪の「ぼっぼ」さんだ。

以来、共同連はコッペを続けるにあたっての目指すべきところであり、各地の共同連の仲間との交流はコッペを続ける原動力でもあった。

2016年の共同連の全国大会は、その大阪で行われた。古くからの顔見知りに加え新しいメンバーが参加しての大会に、コッペのメンバー、そしてソレイユ、また、共同連東北ブロック参加の事業所のメンバーの参加してくれたことは嬉しいことだった。

今回は大会の第4分科会の担当とコーディネーターを仰せつかった。大会前日には、分科会の発題者のメンバーが所属しているカフェコモンズさんにも立ち寄った。そこでの出会いは、発題者とコーディネーターという枠にとどまらない大きな財産になったと思う。本当にお世話になりました。

以下、共同連の機関誌「れざみ」の報告用につづった文章を載せて報告としたい。

第4分科会 共働Ⅱ 「福祉作業所・自主事業から社会的事業所へ」報告

共同連の訴える社会的事業所への共感はできても、実際に自分たちの「場」が社会的事業所と言えるのか、となるとまだまだだなあと感じている方や事業所も多いのではないだろうか。

第4分科会は、障害者総合支援法を活用しながらも自分たちの働き方を模索している方や、どこからも助成金や補助金をもらわないままに事業展開している「当事者中心事業」の紹介などを含めて、4人の方に現場からの報告をしてもらった。

1人目は、静岡市・「ともの家」の滝戸恵美さん。生活介護とB型を運営している。「重い」から仕事ができないのではなく、一人一人の状況をうまく生かしてケーキ作りなどを行っている。寄り添いながら仕事を共にやって行こうとする姿勢を感じさせてくれた。

2人目は、大阪高槻市・「日本スローワーク協会」の亀井雅人さん。精神の当事者でもあります。コモンズハートという便利屋さんを生業にしている。スローワーク協会では、カフェコモンズというB型事業も行っているが、コモンズハートは皆で稼いで山分けが基本。お金はもちろん大事だが、制度からはずれた部分での人とのつながりを大切にしながら商売をしていきたいと、こころ温まるお話でした。

3人目は、大阪・箕面から「ちまちま工房」の炭川亜衣子さん。町の豆腐屋さんから、お豆腐作りを教わり、そのお豆腐やさんの事業を引き継ぎ、毎日お豆腐を製造していますとの言葉通り、この日も豆腐を作りをしてから駆けつけてくれた。ちまちま工房では全く行政からの補助は受けていない。その苦労と「楽しさ」を感じました。

4人目は、大阪・「コーポラティブまいど」の渡辺みちよさん。コーポラティブまいどは、障害をもつ事業主のネットワーク。ルールに乗れない自分たちが、それなら自分たちで支え合う場を作ろうというもの。渡辺さん自身は、「ねこの第4事務所」にてデザイナーを商っています。当事者としてストレートな物言いは、聞いていい気持ちいいがものでした。

始まりも背景も違うメンバーからの報告でしたが、悩みや進みたいと思っている方向性は通いあうものがあり、互いの実践から得るものがあったと思います。会場からも多くの質問が出され、まだまだ話の尽きぬ間に時間が来てしまいました。いい分科会だったなあとほっと一息。

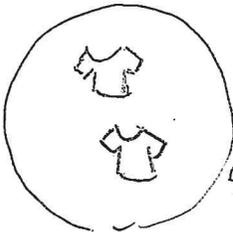
ちなみに前日は、カフェコモンズで昼食。スローワーク的時間を味わいました。打ち合わせを兼ねて顔を合わせた渡辺さんには、その後で梅田を案内して頂き、一緒に行ったコッペのメンバーも存分に楽しませてもらいました。まいど！

共同連大会に行つて来ました。

...明石澄子

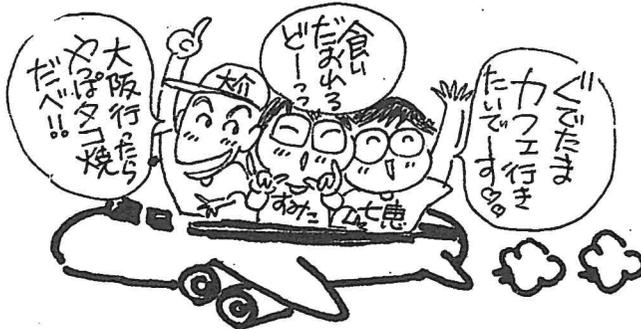
1日目

仙台から飛行機で、伊丹まで
行つて、モノレールにのつて、電車に
のつて、梅田という所でありて、カフェ・エ
ンズで昼食を食べてから、ぐでたまカフェ
と、ヨドバシの上にある、ジャンプショップ
に行きました。(ぐでたまフロート おいしから
たっ!! JUMP SHOPでONE PIECE



「ゴロ・ウソップ」のTシャツGET!!」)

夜は、ホテルの近くの店で、たこやきと
明石やきを食べました。今回は、初めて
一人で泊まるので、ちょっと心配だっ
たけど、シャワーも一人でできたし、ぐっ
すり寝れました。



そ水ぞいの思いを
胸にし、大阪へ！

(イラスト BT)

2日目

次の日は、分科会に参加しました。みんなで大働くことや、働かなくて楽しいことや、大へんなことを話し合いました。私は、配達のことや、いっぱい注文が来て大へんだという話をしました。夜は、交流会でずずめぼどりをしました。

3日目

朝食後に、日下さんに荷物のチェックをもらいました。(前日に、あらかじめ片付けておいたので、スムーズにいきました。) 電車にのって道玄土居に行きました。いろいろな物を見たり、おいしい物をたくさん食べたり、とても楽しかったです。

ネカ弁馬喰

カクテル飲みました(ちょっと大人の味だ)



共同連大会大阪



9月23日～25日まで大阪にぐで
行って来ました。



大阪に着いて、お昼を食べる所
まで、行きました。駅から歩いて
すぐでした。良かった♡

少し、量が多かったけど美味
しく食べました。ユモンズさん
ごちそうさまでした。|||🍴🍴🍴

ゆっくりしてからみんなと大阪町
に行こうと言ったら、渡辺さん
が「大阪の町を案内しますよ」
と言ってくれたので、お言葉に

あまえて、一糸者に大阪の町に
連れて行ってもらいました。
梅田馬車に行ったら、ぐでたまカフェ
があり初めて行けて本当に
嬉しかったです。

斎藤七恵



近道
しましやう



渡辺さんのおかげ
で無駄のない動き
が出来ました。

共同連大阪大会氏家大介

9月23日コッパとソレイユのみなさんと
レコパラに伊豆空港から飛行機にていきた
1日目は、^死死を自学しておけるは。

カフェ commons でいはんばーをたてました。
そして梅田スカイビルの展望台をみました。

とてモチかしてびっくりしました。
大阪くいだいおれで本場のおのみかき
たてました。おれにかけた。

2日目は共同連大阪大会にいきました
おけるはたにかきをたてました
スライムおれりたかりました。そこで

ゆうにいはんはオスツとそめんとサンドイ
をたてました。

つき日は空巻でいおみかけ"をかつて
かえつてきました。大阪はとてまたのし

かった。



言葉遊びは楽しい。赤坂サカス。早口言葉のようだ。麻布十番。後半伸ばして読むとフランス語に聞こえる。たまたまたけやぶやけたまたまた。回文になっているぞ。思い返せば小さい頃から言葉遊びが好きで空想癖がある。本好きの母の影響で、本が大好き。想像力が暴走して、読む本全てが3Dの世界に見えた。夢中になり過ぎる私を父は心配し「目が悪くなる。本は禁止!」とおふれを出した。怖い父には逆らえ無い。私は電気スタンドを押し入れに引き込み、隠れて本を読んでいた。あつという間に目が悪くなった。昔のメガネ屋さんは、フレームの種類が少ない。ましてや、子供用のメガネなんて皆無に等しい。私はしぶしぶ赤いインテリチックなメガネを選んだ。そのトンガリメガネは大人の階段を2、3段飛ばしながら一気に登っていった。さらに見えなくても良いものまでよく見えてきた。

小学4年生の夏、隣の町に家を建てて転校する事になった。私は大好きな友達と別れるのがとても辛かった。新しく引っ越した所は、閉鎖的で、新参者は偏見の目にさらされた。母が標準語でしゃべっただけで、気取っているといじわるを言われた。合わせてなまって話せば良いのだろうが、人間そこまで器用に立ち回る事は出来ない。

前居た所は、居心地が良かった。市営住宅が集まった団地。その真ん中に小学校があった。常に人の出入りが激しく、新しい風が流れている。季節事沢山のイベントがあった。私はスポーツは苦手だったが、凧上げや雪だるま作りが得意だった。適材適所。それぞれが活躍できるチャンスがあった。それが自信に繋がっていたように思う。みんな仲良く穏やかな所だった。

学校の目の前の団地から、脳性麻痺で、歩くのも不自由な小さな女の子が毎日学校へ通っていた。通い始めの頃は、お母さんが付き添っていたが、段々一人で通えるようになった。どんな困難も笑顔で頑張る姿に私達はいつも勇気もらっていた。学校の前の信号の無い横断歩道は、一番の難所だった。車を止めて運転手さんが道をゆずっている。我が子の背中を見守るお母さんがいる。友達が道路の向こうで待っている。転びそうになりながらも、しっかりと足取りで前へと進む。渡りきった時の笑顔は可愛らしく、勇ましくもあった。周囲の人はいつも暖かく見守り、必要とされた時だけ、手を貸す。授業も一緒に受けていた。私達は共に学び共に成長していった。それが当たり前の日常だった。

しかし、引っ越した先の学校は何もかもが違っていた。転校初日、朝学校に行く途中。障害のある男の子を、いじめる集団に出くわしたのだ。「学校に来るな。病気がうつる。」と皆で囲んでいじめている。私は黙って見過ごす事が出来なかった。どうやって止めたかは覚えていないが、去り際にいじめっ子の親分が、道路につばを吐いた事だけ、はっきりと覚えている。その大人びた行為が可笑しくて思わず笑ってしまった。笑った事が悪かったのか、転校早々私も毎日いじめられ

るようになった。くじ運が悪い事に、いじめっ子の親分と同じクラスになったのだ。

いじめられていた男の子は、違うクラスにいた。その子の教室は学校の一番すみにあり、入り口には可愛らしい文字で「特殊学級なかよし」と、書いてある。特殊って何？なかよして...私はばく然とした違和感を感じた。なかよしの人は例外なく全員いじめの対象になっていた。いじめっこはかなりかしこい。大人の前ではめちゃくちゃ良い子だ。担任の先生は学校で一番若く、熱血で、曲がった事が大嫌いだ。いじめは絶対に許さない。しかしみんなはいじめっこの親分が怖くて、先生にも、親にも告げ口をしなかった。私も新しい家を建て、懸命に働く両親に心配をかけたくなかった。なんでも話せる母にさえ言えずにいた。

今になって思えば、先生は私がいじめられている事に気付いていたと思う。色々話しをするきっかけを作っていたし、ずいぶん気を遣ってくれていた。でも正論は、聞く耳が無ければ、何にもならない。先生の思いは誰にも届かなかった。

ある日、体育の授業の前、教室で着替えていた時に事件がおきた。いじめっこ達が、いつも以上に私にしつこく絡んでくる。絶対泣かせようと、みんなで決めたのだろう。いつも相手にしない私だが、聞き捨てられない事を言われた。

「お前の妹ってブスだなー。よく生きていられるな。」

妹の名誉のため言っておく。決してブスでは無い。別にブスが悪いわけでもない。嫌なのは家族をけなされている事だ。いつも冷静な私も顔色が一瞬変わった。いじめっ子達はそれを見逃さなかった。ここぞとばかりにはやしたてる。

「お前のオヤジ柄悪いよなー、ヤクザだろ？」

私は、わかる。見た目そう思うよな〜。と、瞬時に落ち着いて来た。いじめっ子達はめちゃくちゃ焦っている。

「お前のオヤジ変な服着てるな。ヤクザにもらったんだろ？」

私はヤクザが人に服をくれるか？しかもバカボンのパパみたいな腹巻きにステテコを？思わず吹き出しそうになった。その瞬間。遠くで見ていたいじめっ子の親分が突然立ち上がり近づいて来た。

そしてバカにしたように、こう言ったのだ。

「お前ら家族、みんな特殊学級にいたんだろ？目障りなんだよ。迷惑だからバカは死ね！」

皆も口々にはやしたてる。

「死ね！死ね！バカは死ね！」

私は囲まれ代わる代わる肩を押された。押されながら、私はぼんやりと考えた。障害って何んだろ？何かが出来ない事？私達も出来ない事いっぱいあるよね...

私は、前の学校で頑張っている、女の子の事を思い出した。もし彼女がこの学校にいたら、きっとあの男の子のように、あの端の教室に入れられ、毎日毎日いじめられ、バカにされ、泣かされるのだろう。私は彼女の頑張りを否定されたように感じた。何か私の中に溢れ出し、思わず怒りの鉄拳が飛んだ。

思えば、引っ越し前から毎日父の命令で、新しいうちの庭を造っていた。ガーデンなんて素敵なレベルの物では無い。父の友達がトラックで土砂を運び、私達が整地する。庭石や砂利も一輪車で運んだ。私はいつの間にかブルースリーのようなムキムキの小学生になっていた。

多勢に無勢。負けると思ったが、私はケンカが超強かった。カンフー好きの兄としょっちゅう映画の真似をしていたからだ。気が付けば、いじめっ子の親分がしゃがみこんで泣いている。騒ぎをききつけ先生が飛んで来た。今思うと、あれだけ大暴れしたのに色々な意味で、大事に至らなかったのは多分先生のおかげだろう。

私は一人教室に残った。誰もいない教室。窓から広い校庭が見える。みんながドッジボールをしている。いじめっ子の親分は校庭のすみでまるまって横になって動かない。先生が時々声をかけている。

痛いのかな...加減すれば良かった...ふと見上げると、遠くに前住んでいた団地が霞んで見えた。たいして離れていないのに、なんでこんなにも違うのだろう。みんな今何をしてるだろうか。皆に会いたい。帰りたい。話したい事が沢山ある。時間が戻れたらどんなに良いだろう。

引っ越して始めて涙が出た。人を殴った事が一番悲しかった。

体育の授業が終わり、何事も無かったかのようにみんなが戻って来た。私は先生に「授業をさぼってすみませんでした。」と謝った。が、みんなには謝らなかった。先生は驚き出せるほど大きな手で、私の頭をくしゃくしゃとなで、一言

「お前は正しい。」と、大きな声で笑って言った。私は心の中で「でも、けんかはダメだと思うよ。先生。」とつぶやいていた。

辛い取っ組み合いのケンカをしたのはこれが最初で最後になった。正確にはケンカが出来なくなったのだ。私はクラスに存在しない扱いになった。まるで空気のように誰も私を見ない。出来たばかりの友達も遠くから見ている。相手が居なければ、仲直りもけんかも出来ない...みんな親分と私が怖いからしょうがない。と感じた。私は友達を作らない事にした。私と友達になったらその子達もきつといじめられる。それはあまりに可哀想だ。

私は大好きな本を友達に選ぶ事にした。そしていつのまにか昼休みの図書室は私の秘密基地になった。

沢山の本が揃う図書室には、いじめっ子は誰も来ない。図書の先生がずっといるからだ。図書室は広く、日当たりが良い。本を読みお昼寝をするのにちょうど良かった。そんな中、入学したばかりの親戚の子が絵本を読んでと私にせがんで来た。家に遊びに来た時、いつも読んであげていたからだ。家にはお金は無いが本は沢山あった。

私は母が読んで聞かせるように、心をこめて絵本を読んであげた。図書室の先生がニコニコしながら拍手をして近づいてくる。人は誉められると調子に乗るものだ。先生の選んだ絵本を次々読んで聞かせた。

それがいつのまにか日課となり、昼休みの図書室に人が集まってくるようになった。絵本の数は限り無くある。だんだん面白くなり紙芝居にも手を出した。図書室の先生は読む物を切らさない。よその児童館や図書館から、新作の絵本や紙芝居を次々借りて来る。

沢山の物語の世界をみんなと一緒に旅する日々。みんなの笑顔に私は癒やされ、自分の居場所を見いだしていた。図書室には転校初日に助けた男の子もよく来ていた。ここに居ればいじめっこ達は絶対に近づかない。彼の良い意味でのしたたかさを知り、私は嬉しくなった。私も彼もここに居れば寂しくなかった。

結局その男の子とは同じ中学に進学しなかった。また会えると思いきんでいた私はさよならも言えず、その事が心の片隅でいつもくすぶっていた。あんなに意地悪されたけどちゃんと立ち直れたかな？次の学校では楽しく過ごしているかな。

中学校は他の地区から通う人が増え、クラスが3倍になった。そしていじめっこはいじめられっこ達の反乱にあい、陰湿な陰謀をくわだてられ、一人一人潰されていった。

私も計画に誘われたが参加しなかった。どちらも正しいとは思えなかったからだ。

私は中学校で演劇と出会い、毎日部活ばかりしていた。私の世界は本の世界から演劇の世界へと進化していった。友達もいつの間にか沢山出来た。

中学3年生になったある日、中体連で前の学校に通っていた脳性麻痺の女の子を見かけた。歩くのも大変だった彼女が、かなり上手に歩いている。しかも長い髪の超美少女になっていた。笑った顔がお母さんにそっくりだ。これまた美しい友達二人に挟まれ、まるで三つ子のように仲良く並んで歩いている。私は楽しそうに話している彼女を見て嬉しくて、涙が出そうになった。思わず立ち止まり空を見上げた。

空は青く、飛行機雲が真っ直ぐどこかを目指しのびていった。明るい日差しを受け眠気に襲われると、先生の大きな手の感触と秘密基地でのみんなの笑顔を思い出す。みんな元気にいるだろうか？

多分今の私が福祉の世界にいるのは、この体験が影響しているのかもしれない。色々あったけど、今ここにいられて本当に良かったと思う今日この頃である。

実は、この話しには続きがある。この原稿を書いて数年後、私は大好きだったパン屋の仕事を辞めた。片腎になったのだからしょうがない。我が子のように可愛がっていた仲間達と別れ、別な作業所に転職する事は、正直子供を捨てたようで辛くて辛くて仕方なかった。

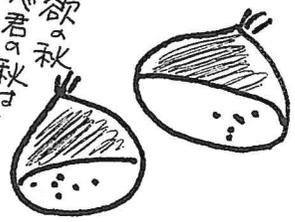
そんなある日、驚く事に気が付いた。転職先の作業所に、あの男の子がいたのだ。お互い立派な大人になり、気づくのに半年もかかった。

私は彼にこうたずねた随分意地悪されたから、立派な大人になれたのか、ずっと気になっていた。と彼に話したら、

「お互い立派なおじさんおばさんになったね。」と、笑顔で言われた。

ウソのような、本当の話しである。

食欲の秋
あべ君の秋は...



『秋』

阿部史希



読書の秋



秋は季節になりまます。スポーツも一番運動もあるいろいろな事あります。僕の秋はトレーニングです。いいな秋は「スポーツの日」本当にこれが秋のイメージがスポーツの秋になっていくでしょう。トレーニングも楽しいです。



生の生等も
すりおろし
フッキー生地
練り込みました

先日、仙台駅で行なわれた
『コナイスハートバザール』では
ミンジャーフッキーが
よく売れました。